

## ワクチンと検査を広めて

### コロナ感染「第5波」をくい止める重要な戦略として

6月15日の市議会本会議で、私は新型コロナウイルス感染対策について質問しました。鈴鹿市でも5月から65才以上のワクチン接種が始まり、6月末には希望者の接種完了のメドが立ってきました。

しかし、日々報告される市内のコロナ感染者の人数は、50代以下の比率が圧倒的に多いのが実態です。高齢者のワクチンが進んでも、肝心の感染が広まっている10～50代への接種は見通しがついていないという現状をどうするのか？が問題です。

私は、とくに「エッセンシャルワーカー」といわれる方々（医療介護の従事者、保育所や学童保育、学校など）への接種を優先的に進めることを求めました。また、介護施設の職員には優先して接種されているが、在宅介護の事業所は対象になっていない点なども改善を求めました。

保健福祉部長の答弁では、エッセンシャルワーカーへの優先接種、休日の特設会場での集団接種を進めること、また接種券を年齢階層別に段階的に発送するなど工夫していくことが示されました。

### 「無症状の感染者」を見つけるための検査が重要

私は、ワクチン接種がまだ相当先になるという中で、並行して社会的検査による「検査と隔離」を行なう必要がある、「無症状の感染者」を発見し保護するために、広く検査を行うことが必要ではないかと提案しました。

現在のやり方は、感染者の周辺の「濃厚接触者」を特定して、または発熱などの症状があり医師が必要と判断した人にPCR検査を行なうというものです。私は濃厚接触者のさらに外側の人でも感染の可能性がある人は、広く検査の対象とすること、とくにエッセンシャルワーカーの働く職場などで、対象を広げた検査を行なうことを求めました。しかしこの質問については、残念ながら具体的な答弁はありませんでした。

# 乗合ワゴン運行、1便当り1.46人

鈴鹿市の「新たな交通システム」の導入として、一ノ宮地区を対象として11人乗りワンボックス車両を使った「乗合ワゴン事業」の実証実験が、1月25日からスタートしました。その5月までの運行実績は表のとおりです。

その実績数値を見ると、利用者が伸びていないことが分かります。

スタートした1月を除けば、利用者は1便当り1.35人となり、1日片道3便、往復6便の運行に対して1人かゼロかという状況です。

もう20年運行しているCバ

乗合ワゴン事業の実績（都市計画課資料から作成）

月	日数	便数	乗車数	1便当	1日当
1月	5	30	99	3.30	19.8
2月	18	108	173	1.60	9.61
3月	23	138	181	1.31	7.87
4月	21	126	169	1.34	8.05
5月	18	108	125	1.15	6.94
合計	85	510	747	1.46	8.79

ス西部路線では、利用者の人数は椿平田線が1便当り11.4人、庄内神戸線が7.4人です。農村地域から市中心部まで走るCバスに比べて、一の宮地区から市役所までしか行かない乗り物では、住民のニーズに答えられないのでしょうか。路線バス方式での実証運行という方法でいいのか、検討は十分にされたのでしょうか。

## 実証運行を続けても住民ニーズに答えられるのか

この乗合ワゴンの運行費用は1日55,000円、年間1,300万円とのことですが、1日10人乗らないこの実績では、実証実験から本格運行への移行はムリでしょう。担当課では、6月に地域住民へのアンケートを実施、その回答を参考に運行方法を改善して、秋以降も実証運行を行なう予定です。

私は6月議会一般質問で、少しの手直しでさらに運行を続けても見通しがもてるのか、またこの方式が市内各地に広げられるのか、「見きわめ」が必要ではないかと意見を述べました。



## アクリル板とマスクで行なう質問

議会もコロナ対策がしっかりされていて、写真のようにアクリル板の向こうからマスクをして発言しています。45分の質問を続けていると、呼吸困難になってきます。

# 電子入札システム導入、来年から

6月補正予算に「電子入札システム」導入のための経費が計上され、議決されました。市が建設工事などを民間業者に行なわせる時には、どの業者に発注するのか競争入札を行ない、予定価格以内でいちばん低い金額を出した業者に落札・契約することになります。また、備品や物品を購入する場合にも、同様に入札で業者を決定します。

一定の資格があれば参加できる「一般競争入札」、業者数をしばって行う「指名競争入札」があり、入札は決められた日時・場所に参集するか、または期日までに郵便で入札書を送るかして、当日に開札し落札者を決定します。

これらの入札手続きの全体を、書類（紙）からインターネット（データ）で行なうように変えるのが「電子入札」です。すでに県や他市で導入が行なわれ、今後も広がっていく見通しです。ときどきニュースになる「談合」「官民癒着」「汚職」の防止、「透明性の確保」「公正な競争」を促進する効果があると言われていています。来年の3月からシステム運用の予定です。

---

## 東京都議選、共産党が19議席に前進

7月4日に行われた東京都議会議員選挙で、日本共産党は1議席増の19議席を獲得しました。夜中までハラハラしながら開票速報を見ていましたが、定数2の文京区・日野市・北多摩4区での勝利をはじめ、次々に当選者が決まってきて、安堵しました。4年前に応援に行った杉並区の前原あきらさんも第2位で再選、また女性議員が19人中14人(74%)となったのも嬉しいことです。次は秋の衆議院選挙、都政に続いて国政でも日本共産党の前進めざし、頑張らねばと思います。

---

## コロナ禍と猛暑の中での五輪開催強行ストップ！

都議選でも大争点となった、コロナ感染拡大の下でのオリンピック開催の強行。23日の開会に向かって、次々と矛盾が噴き出してきて現場は右往左往となっています。これほど国民の不安と疑問が高まる中で強行すれば、「平和の祭典」の名が泣くというものです。

当初から「なぜ猛暑の7月にするのか？」「フクシマの復興は出来てないのに」、それに加えて「コロナを克服した証」など、何処にあるのか？

ずいそう



## 日本人の故郷・心の歌

朝日新聞OBの伊藤千尋さんの「心の歌よ！日本人の『故郷』を求めて」という本が、静かなブームになっています。日本人ならだれでも知っていて、そして歌える歌はどのように生まれたのか、作者はどんな思いでその歌を書いたのか。新聞記者お得意の足を使って徹底した取材を重ねて、一つずつ歌のルーツを掘り起こしていきます。歌の舞台となった地方を訪ね、作詞者・作曲者のゆかりの人から話を聞きとって書き上げたドキュメンタリーです。

### かあさんの歌・瀬戸の花嫁は、こうして出来た

「かあさんの歌」（かあさんは夜なべをして手袋あんでくれた・・・）の作者・窪田聡さんは意外にも東京下町の生まれ。文学を志して家出したが生活に追われる日々、そんな息子に母親が内緒で着物や食べ物を送って応援してくれた。その母親への感謝の気持ちを、戦争中に疎開した信州の雪深い村での暮らしを思い出しながら綴ってできた歌なのでした。徐々にうたごえ喫茶などで広まり、1962年「NHKみんなのうた」でペギー葉山が歌い大ヒットとなりました。当時私は4年生でしたが、その放送を今も憶えています。

小柳ルミ子の歌う「瀬戸の花嫁」（1972年）の作詞は山上路夫さん。当時の瀬戸内海は汚染され、赤潮で真っ赤な海になっていました。山上さんは、かつて船から見たきれいな海を思い出し、段々畑と夕焼けの景色を歌詞にしました。平尾昌晃さんの曲とぴったり合い、ヒットしました。その翌年、瀬戸内海環境を保全する法律ができ、瀬戸の海はきれいな海に戻っていきます。当時の自然保護団体のリーダーは、「『瀬戸の花嫁』は、傷ついた瀬戸内海が自ら発したメッセージだった」と、伊藤さんに語っています。

こんなふうに伊藤さんは、日本各地を訪ね歩き、童謡から流行歌まで幅広い「心の歌」取材し、私たちに伝えてくれます。歌はジワジワと人々の中に広がり、何年もかかってヒット曲になり、何十年も歌い継がれます。

私にもそんな経験が。高校生の時、深夜のラジオから流れてきたある番組のテーマ曲を、いいなあと聞いていました。それがジワジワ評判になり曲名がついて、由紀さおりの「夜明けのスキヤット」になったのでした。今この歌を聞くと、あのころの自分を思い出します。私の「心の歌」です。